

[B年] 降誕前第5主日(2022年11月20日)**【旧約聖書日課】サムエル記下 5章1～5節**

¹イスラエルの全部族はヘブロンのだビデのもとに来てこう言った。「御覧ください。わたしたちはあなたの骨肉です。²これまで、サウルがわたしたちの王であったときにも、イスラエルの進退の指揮をとっておられたのはあなたでした。主はあなたに仰せになりました。『わが民イスラエルを牧するのはあなただ。あなたがイスラエルの指導者となる』と。」

³イスラエルの長老たちは全員、ヘブロンの上のもとにきた。だビデ王はヘブロンで主の御前に彼らと契約を結んだ。長老たちはだビデに油を注ぎ、イスラエルの王とした。

⁴だビデは三十歳で王となり、四十年間王位にあった。⁵七年六か月の間ヘブロンでユダを、三十三年の間エルサレムでイスラエルとユダの全土を統治した。

【使徒書日課】**コリントの信徒への手紙一 15章20～28節**

²⁰しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。²¹死が一人の人によって来たのだから、死者の復活も一人の人によって来るのです。²²つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです。²³ただ、一人一人にそれぞれ順序があります。最初にキリスト、次いで、キリストが来られるときに、キリストに属している人たち、²⁴次いで、世の終わりが来ます。そのとき、キリストはすべての支配、すべての権威や勢力を減らし、父である神に国を引き渡されます。²⁵キリストはすべての敵を御自分の足の下に置くまで、国を支配されることになっているからです。²⁶最後の敵として、死が減ぼされます。²⁷「神は、すべてをその足の下に服従させた」からです。すべてが服従させられたと言われるとき、すべてをキリストに服従させた方自身が、それに含まれていないことは、明らかです。²⁸すべてが御子に服従するとき、御子

自身も、すべてを御自分に服従させてくださった方に服従されます。神がすべてにおいてすべてとなられるためです。

【福音書日課】ルカによる福音書 23章35～43節

³⁵民衆は立って見つめていた。議員たちも、あざ笑って言った。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」³⁶兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して、³⁷言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」³⁸イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札も掲げてあった。

³⁹十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」⁴⁰すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れぬのか、同じ刑罰を受けているのに。⁴¹我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」⁴²そして、「イエスよ、あなたの御国においでになるときは、わたしを思い出してください」と言った。⁴³するとイエスは、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

サムエル記下 5章1～5節

1イスラエルのすべての部族はヘブロン¹のダビデのもとに来て、こう言った。「御覧ください。私たちはあなたの骨肉です。2これまで、サウルが私たちの王であった時にも、イスラエルの進退を決めていたのはあなたでした。主はあなたに仰せになりました。『わが民イスラエルを牧するのはあなただ。あなたがイスラエルの指導者となる。』」

3イスラエルの長老たちは皆、ヘブロン¹の王のもとに来た。ダビデ王はヘブロンで主の前に彼らと契約を結び、彼らはダビデに油を注いでイスラエルの王とした。

4ダビデは三十歳で王位につき、四十年間統治した。5ヘブロンで七年六か月の間ユダを統治し、エルサレムで三十三年間イスラエルとユダの全土を統治した。

コリントの信徒への手紙一 15章20～28節

20しかし今や、キリストは死者の中から復活し、眠りに就いた人たちの初穂とされました。21死が一人の人を通して来たのだから、死者の復活も一人の人を通して来たのです。22つまり、アダムにあってすべての人が死ぬことになったように、キリストにあってすべての人が生かされることになるのです。23しかし、一人一人にそれぞれ順番があり、まず初穂であるキリスト、次いで、キリストが来られるときに、キリストに属する人たち、24それから、世の終わりが来ます。その時、キリストはあらゆる支配、あらゆる権威と勢力を無力にして、父である神に国を引き渡されます。25キリストはすべての敵をその足の下に置くまで、国を支配されることになっているからです。26最後の敵として、死が無力にされます。27「神は、万物を、その足元に従わせた」からです。「万物が従わせられた」と言われるとき、万物をキリストに従わせた方がそれに含まれていないことは、明らかです。28万物が御子に従うとき、御子自身も、万物をご自分に従わせてくださった方に従われます。神がすべてにおいてすべてとなられるためです。

ルカによる福音書 23章35～43節

35民衆は立って見つめていた。議員たちも、嘲笑って言った。「他人を救ったのだ。神のメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」36兵士たちもイエスに近寄り、酸を差し出しながら侮辱して、37言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」38イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた罪状書きも掲げてあった。

39はりつけにされた犯罪人の一人が、イエスを罵った。「お前はメシアではないか。自分と我々を救ってみろ。」40すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。41我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」42そして、「イエスよ、あなたが御国へ行かれるときには、私を思い出してください」と言った。43するとイエスは、「よく言うておくが、あなたは今日私と一緒に楽園にいる」と言われた。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・11月20日「降誕前第5主日」の日課主題は「王の職務」。石神井教会では、「降誕前第5主日」の呼称に代えて、伝統的な呼称である「終末主日」を用いる。

・旧約聖書日課は、「サムエル記下」より、サウル王戦死後のユダとイスラエルでダビデが王として即位していく経緯をまとめた箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙一」から、死者の復活に関する疑念に応えてパウロが復活論を試みた章句の中の一部。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、主イエスが十字架の上で人々の嘲笑を受ける中で共に磔にされた犯罪人に救いを告げる箇所。

旧約日課(サムエル下5章より)

・「サムエル記」は、ユダヤ正典「前の預言者」の第三に置かれた「イスラエルの王国成立史」としてまとめられた文書。便宜上、上巻下巻に分けられている。上巻はベニヤミン族出身の王サウルの時代、下巻はユダ族出身の王ダビデの時代を扱っている。上下巻を通して、ダビデの存在感が大きく、「ダビデ王一代記」のような「ダビデ伝説」を主要な資料に用いていると推認される。サウル王、ダビデ王、またソロモン王の時代を「イスラエル統一王国時代」と称することがあるが、歴史上、この時代に統一的な「イスラエル民族」観があったわけではない。実態は、「士師記」が描くような独立性の強い各部族のゆるやかな合従連衡が積み重ねられた結果、「サムエル記」が注意深く記述しているように、エフライム族およびベニヤミン族を中心とする北部の「イスラエル」とユダ族を中心とする「ユダ」が、それぞれに自部族のルーツに関わる伝承文化を形成していたと考えられる。「サムエル記」上巻が描くサウル王時代の王国の実態も、ベニヤミン族出身のサウルがエフライム族をはじめとする北部諸部族に推戴されて「王」を称するようになり、ユダ族は一種の属国としてサウルの王国に編入されていたものと考えられるのである。そこで、「サムエル記」下巻は、サウル王および後継者のヨナタン王子が共に対ペリシテ戦役で戦死した後、サウル王家から当然のように次王としてイシュ・ボシエトが王位についたとする一方で、ユダ族はサウル王朝から自立してダビデを王として即位させたという経緯を伝えるのである(サム下2章)。ここに、サウル王家の「イスラエル」王国と、ダビデ王家の「ユダ」王国が並び立つことになるが、「イスラエル」王国の諸部族はまもなくサウル王家を見限って、「ユダ」の王ダビデを「イスラエル」の王としても迎え、ダビデ王家による「イスラエル・ユダ連合王国」が成立する。日課箇所は、その経緯を踏まえて、ダビデが、まず「ヘブロン」を拠点とする「ユダ」の王として即位し、七年後に、「イスラエル」の王としても即位するに際して、王国の拠点すなわち都を「エルサレム」に移したことを、簡潔にまとめて伝えている。「エルサレム」は、ユダ族領とベニヤミン族領の境界に位置する。

・「ヘブロン」は、「創世記」の族長物語にも現れる地名で、特に同地の「マムレの榿の木のところ」と呼ばれる場所は族長アブラハムと結びついて知られている。一方、「ヨシュア記」や「士師記」によれば、ヨシュア率いるイスラエルの民がカナン地方に侵入してきた時代、「ヘブロン」は異民族の王が支配する都市であったが、カレブ率いるユダ族が支配下に置いたとされている。この地域から南方エドム山地にかけては、「エドム人」など山岳部族が諸都市を築き、ゆるやかな連携を保っていたと見られ、「ユダ族」は、それらの山岳系部族を取り込み、まとめ上げながら形成されたと考えられる。

・日課箇所では、ダビデは、すでに「ユダ」の王として即位していたが、「イスラエル」の王位につくにあたって「イスラエル」の長老たちの手で「油を注がれ」る儀式を受けたとされている。これに先立って「ユダ」の王として即位する際には、「ユダ」の人々が「油を注いだ」ことも描かれていた(サム下2:4)。ここでの「油注ぎ」は、民(の代表)が「王位」を承認する行為として執り行われている。一方、「サムエル記」上巻によれば、ダビデは早い段階で、預言者サムエルから「油注ぎ」を受け、神からの選びと召命が宣言されていたとされている(サム上16章)。古代世界で、世俗的王権は、軍事的権力を背景に支配下に置く民の承認が不可欠であったが、その王権を長期にわたって、世代を超えて維持していくためには、神的権威として永続的に存在してきた宗教継承者としての祭司による承認と宣言が重要な意義を持ったと考えられる。

使徒書日課(1コリント15章より)

・「コリントの信徒への手紙一」は、使徒パウロが自らの宣教団の活動の一環として実施したマケドニア伝道の中で創設に至った「コリントの教会」に宛てて記した一連の書簡の中の一つ。「コリントの教会共同体」は、パウロらがコリント滞在中に立ち上げられたが、その中核には、ローマから退避・滞在していたユダヤ人夫妻アキラとプリスキラがいた。彼らは、おそらく、シリア・アンティオキアの教会共同体と同じような経緯で立ち上げられていたローマの教会共同体に属するメンバーであった。

・コリントは、アテネから80キロほどの距離、ペロポネソス半島の付け根に位置する古代ギリシア都市国家から発展した港湾都市の一つで、「コリントス地峡」を挟んでエーゲ海とイオニア海を結ぶ地中海貿易のハブ港として古くから栄えていたが、前146年に共和制ローマの軍事侵攻によって破壊された後、ユリウス・カエサルの時代に再建されてローマの解放奴隷が入植、ギリシア人、ローマ人、ユダヤ人を主たる居住民とする都市とされていた。このような背景から、少なからぬユダヤ人が所在すると共に、古い伝統やしがらみから自由な新興都市としての意識が強かったと考えられる。

・パウロは、この書簡で、自らが使徒たちの教えを継承する立場にあることを強調しながら、教会で生じていた問題や対立に助言や意見を述べている。

・日課箇所を含む 15 章では、「死者の復活」に対して疑義を呈する者(15:12)への反論として、パウロの復活理解が述べられている。「復活」信仰は、すでにユダヤ教内でファリサイ派を中心に広く認められていたが、それは、「終末における全死者の復活」信仰であり、イスラム教も含めて共有されてきたものである。一方、キリスト教会独自のものとして「キリストの復活」信仰があるが、これは、「終末」を待たずにすでに「キリストは復活した」と信じる信仰で、「終末における復活」信仰を前提にしながら、「終末」を現在化するものとして独自に発展した。「終末」は、「主の到来する日」として位置づけられており、「終末」の現在化とは、「主の到来」をすでに起こったこととして認め、主の最終的な支配に服する生き方を始めることを意味する。

福音書日課(ルカ 23 章より)

・日課箇所は、「主イエスの受難物語」の最終盤、「十字架上の死」の中の一場面である。「十字架上の死」を含む「受難物語」は、四福音書が異口同音に伝えている。

・日課箇所は、主イエスの十字架に掲げられていた「罪状書き」を、「これはユダヤ人の王」として伝えている。「ヨハネ福音書」だけは、この罪状書きの内容にユダヤ人の祭司長たちが異論を唱えたという逸話を伝えている(ヨハネ 19:21~22)。ユダヤ地方は、紀元 6 年に当時の皇帝アウグストゥスによって属州編入された後は、一時的にヘロデ家の者によって自治王国の体を取ることもあったが、基本的に属州総督の下に置かれていた。「ユダヤ人の王」の「罪状書き」が属州総督の命によって記されたものであるならば、それは、飽くまで「傀儡王としてのユダヤ王」であって、総督に「王」の事実上の生殺与奪権があることを示すものであったと考えられる。しかし、形式的には、ローマ帝国の属国の王権は「ローマ元老院」の承認によって正統性が担保されていた。この点を考慮するならば、総督が脱法的に「ユダヤ人の王」の罪状書きを敢えて掲げさせたという逸話は、神意の働きを見てのことになるのかもしれない。

・十字架上で両隣の犯罪人と対話をし、一方の者の悔い改めの態度を伝える(40~43 節)のは、「ルカ福音書」だけである。

・43 節「楽園(パラダイス)」は、パウロ書簡(Ⅱコリ 12:4)および黙示録(2:7)だけで現れる語。エフェソなどアジア州の教会共同体で用いられた用語と考えられる。ギリシア語「パラダイス」は、古代ペルシア語「パルデイス」に由来し、セム語圏でも広く「領域・領地」を意味する語として用いられており、バビロン捕囚後のヘブライ語にも借入され「庭園」の意で用いられている(雅歌 4:12、コヘ 2:5、ネヘ 2:8)。「七十人訳」では、「エデン」の訳語としてこの語が用いられている。

来週の誕生日 (11 月 20 日~26 日)

主日礼拝の讚美歌から

- ・21-13 番「みつかいとともに」(= I 162 番「あまつみつかいよ」)は、18 世紀英国の独立教会牧師ペロネーの作詞。彼の父は国教会司祭でウェスレー兄弟のメソジスト運動の賛同者だったが、彼自身は、ウェスレー兄弟らとは袂を分かって独立教会に属した。曲は、18-19 世紀米国で不動産業を営みながらピューリタン教会の牧師も務め、音楽活動もしたホールデンが、この詞のために作曲。
- ・21-57 番「ガリラヤの風がおる丘で」(= III 5 番)は、横浜指路教会で受洗し銀座教会員として長く歩んだ別府信男が中高生キャンプのために作詞し「ともにうたおう」の歌詞公募に応募して採用された歌詞に、カトリック信徒の作曲家・蒔田尚昊が曲を付した。
- ・21-512 番「主よ、献げます」(= I 339 番「君なるイエスよ」)は、19 世紀に女流詩人として知られたハヴァガルの作詞で、ある滞在先で経験した集団回心に感謝する中で作られたとされる。一時は広く歌われていたが、現在では、メソジスト讚美歌集のみで残る。

21-13「みつかいとともに」

All hail the power of Jesus name!

1. All hail the power of Jesus' name! / Let angels prostrate fall; / bring forth the royal diadem, / and crown him Lord of all. / Bring forth the royal diadem, / and crown him Lord of all.
2. Ye chosen seed of Israel's race, / ye ransomed from the fall, / hail him who saves you by his grace, / and crown him Lord of all. / Hail him who saves you by his grace, / and crown him Lord of all.
3. Sinners, whose love can ne'er forget / the wormwood and the gall, / go spread your trophies at his feet, / and crown him Lord of all. / Go spread your trophies at his feet, / and crown him Lord of all.
4. Let every kindred, every tribe / on this terrestrial ball, / to him all majesty ascribe, / and crown him Lord of all. / To him all majesty ascribe, / and crown him Lord of all.
5. Crown him, ye martyrs of your God, / who from his altar call; / extol the Stem of Jesse's Rod, / and crown him Lord of all. / Extol the Stem of Jesse's Rod, / and crown him Lord of all.
6. O that with yonder sacred throng / we at his feet may fall! / We'll join the everlasting song, / and crown him Lord of all. / We'll join the everlasting song, / and crown him Lord of all.

21-512「主よ、献げます」

Take My Life and Let It Be

1. Take my life, my talents and my days; / let them flow in ceaseless praise. / Take my hands, and let them move / at the impulse of thy love. / Take my feet, and let them be / swift and beautiful for thee.
2. Take my voice, and let me sing / always, only, for my King. / Take my lips, and let them be / filled with messages from thee. / Take my silver and my gold; / not a mite would I withhold. / Take my intellect, and use / every power as thou shalt choose.
3. Take my will, and make it thine; / it shall be no longer mine. / Take my heart, it is thine own; / it shall be thy royal throne. / Take my love, my Lord, I pour / at thy feet its treasure-store. / Take myself, and I will be / ever, only, all for thee.